



いとう



海援隊旗(二隻の旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

# 公平 KOHEI MUSHI 無私

## 「龍馬より先に世界を夢見た男」 吉田東洋と開成館展

会期：平成24年6月30日(土)～同年9月28日(金)

吉田東洋はペリー来航前後の難局に土佐藩の参政を務め、15代藩主山内容堂の下で藩政改革を行う。疲弊しきつた幕末諸藩が、大きな活躍をするためには、改革が必要不可欠だった。東洋の政策は、ペリー来航以後の土佐藩の方針決定や、藩の法律整備、藩校の見直し、開成館に繋がる殖産興業、身分に拘らない人材育成など見るべき点が多い。土佐藩の幕末史は土佐勤王党や脱藩浪士を中心に語られる事が多いため、こうした事業の本質が紹介される事はあまりなかった。歴史上には優れた人物であっても評価が低い人物がいる。東洋はまさにそういう人物で、一つ一つの政策を見ると幕末の土佐藩でも随一の能力を持った政治家だと分かる。本展ではこうした東洋の政策を公平な視点で紹介し、東洋が幕末土佐藩に果たした役割を考えてみたい。そして、なぜ優れた政治家であり、良い政策を行っていたのに、評価が低く勤王党に暗殺されてしまったのか。また、意外にも東洋の思想は、龍馬の思想と似通った部分が多くある。これらについても、ぜひ知っていただきたい。



弘化年間と推定されているため、ペリー来航より5年か前ということになる。殺軒の能力を褒め、「土佐藩で名を

東京大学史料編纂所に残されている東洋の手紙(パネル展示)が大変面白い。友人の松岡毅軒に送った物で、東洋の思想をよく表している。手紙の年代ははっきりしないが、

残す人物になれ」とエールを贈った後、「自分は北アメリカに名を轟かせたい」と妙な野望を語っている。ペリー来航前にこんな野望を持つ日本人がいたであろうか。おそらく

く東洋くらいのものではないだろうか。しかも、この時の署名は「吉田六大洲」となっている。六大洲とは、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・オセアニア・北アメリカ・南アメリカのことで、全世界を意味している。「東洋」という名前も大きいのが、更に大きな意味の名前である。後に東洋の主君となる山内容堂は「鯨海酔侯」という豪快な号を使っており、容堂と東洋の気が合うのが分かる気がする。東洋は非常に魅力ある人物で、調べれば調べるほど面白い。

ペリー来航後には「航海術を身に付け、蒸気船四艘を買い入れ、まず南洋諸島を開拓する」という案を持っており、龍馬と話が合いそうだ。これらの話から東洋の世界観が窺える。一藩の政治家には惜しい人物である。また、谷干城の回顧談には、次のようなものもある。東洋が創った文武館が開校した頃のこと、東洋暗殺直前のことである。文武館の史学助教に任命された谷を困らせようと、ある人が、難しい漢文である八家文の「曹成王碑」について質問してきた。谷はそれを読んだ事がなく、困りきっていると、東洋が進み出てきて、「これは難解な文章で、自分でもこの年に至るまで十分に読む事はできない」と言った。さらに、質問者が聞いてきた箇所を読み解いて聞かせた上に、「こんな文章は誰でも字書を引きなげらでないと読めないものだ。こんな文章を読むより、読み易い文章を読むべきだ」と質問者をやり込めた。谷は地獄に仏の心境で、さらにこの難解な文章を読み解く東洋の学識と人を制圧する力に驚いたそう。東洋の直筆資料は非常に少ないのが現状だが、本展ではこうした廻りの人のエピソードなども交えて東洋の人柄や業績を紹介したい。

三浦 夏樹



# 光と影を追って…素顔をのぞかせた平井兄妹

## 「龍馬の青春～龍馬と加尾と収二郎」展終わる



「龍馬と加尾と収二郎」展を見た後、会場でパチリ。  
なごやかな様子の平井志治氏ご夫妻と息子の志江氏ご一家。

開催初日のこと。熱心に収二郎の和歌を書き写している若い女性が見えた。入口にある展示ケースの中、和歌短冊に立ち止まっているのである。その様子には思わず声をかけた。「いかがですか？」

「収二郎がこんなにやさしい歌を詠んでいたなんて、驚きました。大分から来た甲斐がありました。」「龍馬伝」で興味を持った平井収二郎をもっと知りたくて、開催初日を持って九州から訪ねてきたという。「ものすごい充実感です」とも。その言葉に私は驚き、素直にうれしかった。龍馬の初恋の人と言われる加尾はむろん、土佐勤王の両翼のひとりとして活躍した収二郎を龍馬と絡めて紹介したことは今まであまりなかったのではないかと。なんとといっても平井兄妹にまつわる資料も一挙公開できた。平井家をはじめ県立歴史民俗資料館などのご理解とご協力のおかげである。

パネルでは上洛後、龍馬と再び会う収二郎の無念。恋心を捨て、それぞれの道を行く三人の若者を追った。展示資料は前期では三人の活躍期が中心であったが、後期資料は収二郎の切腹を中心としたものであったため、爪書といわれる辞世の句などは展示作業でもやるせなさを感じた。多くの方が熱心にパネルを読み、展示資料に関心を持ってくださった。平井兄妹だけでなく、加尾の夫・西山志澄への関心も高まり、期間中には平井家の墓地移設整備完成や平井家ご一家の来館もあった。久しぶりの高知だということ、孫の平井志治氏は「子どもの頃、この辞世の句は額に入れてありました。加尾さんが大切にしていた資料を入れていた文箱もなつかしい」と感慨深げ。お孫さんが歴史に興味を持っているということ、そのことに目を細める様子も印象的であった。また、加尾の愛した庭。小川邸での近江屋対談は、予想以上の人気で、定員三十人のところ五十人近くに膨らんだ。当日、満開のサツキが参加者を出迎え、庭はため息のような歓声に包まれた。そのように様々な充実感があった三ヶ月間であった。

前田 由紀枝

# 「これからは若者の交流が大切」と強調 あくまでもフレンドリーに

## ジョン・ルース駐日米国大使ら来館

春の嵐が吹き抜けた4月3日午後、ジョン・ルース駐日米国大使様一行10人が来館された。天候を見計らいながら、予定時間を調整しながらの慌ただしいスケジュールとなったが、ルース大使は出会う人たちが皆さんと気軽に握手を交わすなどフレンドリーぶりですが、最後は、「シェイクハンド龍馬さん」と握手して締めくくった。

一行は奥さんのスーザンさん、長女のローレンスさん、パトリック・リネハン駐大阪・神戸領事ら10人。今回の訪問先は県庁、県立牧野植物園と坂本龍馬記念館でももちろん初めである。ただ、あいにくの天気が行の行動を阻んだ。午後3時、予定より1時間半の遅れながら、ルースさん一行は笑顔いっぱいバスを降りた。

早速、隣の国民宿舎「桂浜荘」で歓迎セレモニーが行われた。迎えたのは坂本龍馬記念館から館長の私ら職員と、同館が昨年10月、20周年記念事業で企画した「アメリカカフォーラム」への参加者、ジョン万次郎研究家の北代淳二さん、昭和小学校教頭、川崎弘佳さん、高校生の大石すみれさんら10人。ルース大使は日本人の龍馬好きは承知の様子で、龍馬の顔を浮かしたコピー「龍馬カブチーノ」がテーブルに出ると、携帯を取り出して写メールの熱心さ。「私のツイッターで紹介しますよ」。アメリカカフォーラムがきっかけで生まれた「坂本龍馬財団」の5年後目標「ニューヨーク龍馬ミュージアム」。



龍馬さんと握手するルースさんご一家

設立については「頑張っしてほしい」とのエール、大石すみれさんが今夏、ハワイのプナホウ高校の夏期講習に参加が決まったことを報告すると「これからの日本とアメリカ両国の親密な関係は若者達が作り上げていかねばならない。大石さんのプナホウ参加は大いに歓迎します」と名刺を渡した。その後、館内見学は文字通り駆け足となったが、玄関前でルース大使のご家族は三人が一緒に龍馬を囲んで握手してカメラに収まり再会を約して、飛行場へ急いだ。

森 健志郎

## 期待高まる！

# 「坂本龍馬財団」全国発信へ

### 設立記念大会・京都

「ニューヨークに龍馬ミュージアムをつくらう」。アメリカカフォーラムの最終日に、そんな「どきの声」があがってから半年。3月20日に立ち上がった一般財団法人「坂本龍馬財団」は1カ月後の4月22日、全国に向けて発信を開始した。

その発信会場は京都。「坂本龍馬財団記念大会」として、よりよい人間の生き方や近未来を学び実践する「にんげんクラブ京都大会」、地震学者・尾池和夫さんらによる「第1回光・水・風フォーラム」とともに開催された。



全国発信する龍馬財団のメンバー 京都国際会館で

中、財団の全国発信にふさわしい会場には、800人を超える人たちが集まった。

大会は竹内土佐郎さんによる「龍馬甚句」(作詞・坂本登)の朗詠と、クラシックギターデュオいちむじんの演奏で開幕し、会場は一気に龍馬色となった。

ステージに視線が集まる中、郷土坂本家九代目の坂本登さん、勝海舟の子孫・高山みな子さん、ジョン万次郎研究家・北代淳二さん、ニューヨークから参加した板越ジョージさん、森健志郎、同財団代表理事らがそれぞれに

熱い思いを語った。

「ニューヨークで見た格差は正デモに幕末を感じた。その日はアメリカカフォーラムを終えていたが、終わりというよりもこれから始まるのだという実感を持った。今から行動を始めるのだという思い。そのときに龍馬財団創設への使命が生まれました」と語る坂本さん。

それに口火を切ったように、「ニューヨークで平和の始まりと終わりを尋ねられたとき、私は、人々が互いの手をつなぐと、平和の始まりで、その手をつなぐときに平和は終わると答えた。今こそ手をつなぎ、行動しなさんと」と高山さん。北代さんは「現代のニューヨークで幕末の、ええじゃないかを感じた。幕末も今も同じ様相がある。今こそ行動するときだ」。

坂越さんは「自分たちでつくろんだ」という意志が明日を変えると思う。我々ニューヨーク側も準備をしています。3年後はすぐ忙しい。そんな力強い呼びかけに、会場は熱気に包まれた。「どのようしたら財団に参加できるのか」「今こそ龍馬が求められていると思う」「龍馬のような人材に出てもらいたい。そういった会場の声を確かな手応えとして、坂本龍馬財団は本格的な活動に入った。行動から創造へ！多くのご賛同をお待ちしております」。

### 財団活動報告

前号でお伝えした、坂本龍馬財団第1回スカラシップ生である県立嶺北高校3年、大石すみれさんは今夏のハワイ・プナホウスクールのパンパシフィックプログラム(環太平洋プログラムPPP)参加に向けて、同スクールの担当教員と交流を重ねている。

そんな大石さん、5月大型連休の最中に最愛のお父さんが急逝された。悲しみに立ち向かう彼女が、プナホウスクールに宛てた一文を紹介したい。「私は嶺北高校生で、高齢化や過疎化など多くの問題を抱え

る高知県本山町という所に住んでいます。私の父はこの町のために多くのことをしてきましたが、この春突然亡くなりました。私は父のようにこの町を救おうと決意しました。私の知識と人間性を大きくするためにPPPに参加します」(原文英語)。「嶺北の龍馬になりたい」。これは、大石さんの高校生洋上セミナー(アメリカ派遣選抜行事)への参加動機だ。あれから二年。大石さんは今、「嶺北の龍馬になる」と強く決意したようである。プナホウの先生方も大石さんの応援に全力をあげるかと伝えてくれている。

孫文、オバマという二人の大統領に代表される、合衆国リーダーを輩出するプナホウスクールは、人間的な成長を大切にす名門校である。先生方の温かいまなざしの中、すみれの名が如く、大石さんが強くやさしい女性として成長することを期待する。

また、財団では今後のプナホウスクールと高知とのつながりも検討中である。前田 由紀枝

一般財団法人「坂本龍馬財団」問合せ先

080-3169-9126(森)  
088-845-1100(小川)



# 「鏢は知っている！」 ⑩

## 土佐の幕末維新

土佐歴史資料研究会 現代龍馬学会

小島 一男

前回までのあらすじ

勝海舟と山内容堂の会見で脱藩の罪を許された龍馬の姿は、慶応3年6月9日、土佐藩船「夕顔」の船上にあった。倒幕の風潮が、その中で苦悶する山内容堂公より上京を命じられた土佐藩参政後藤象二郎に同行していた。土佐藩の将来を模索する後藤、その思いをさらに膨らませつつ日本の新時代を龍馬は「大政奉還」という作戦図面を描いて見せた。時代の動きに加速度が加わる。龍馬は脱藩以来、初めての里帰り、その時に備えた。

### (五) 龍馬の秘策

龍馬の頭の中に、全く武力倒幕という心配がなかったわけではない。だから、薩長の動きは計算の中にあつた。最新型のライフルなどを用意したのも最悪の事態展開が起きて遅れをとってはならぬという読みがあつたからである。土佐藩は、最新型銃に加えて旧式のゲベル銃を予備銃とし、ミニエール銃やエンフィールド銃を中心とする薩摩、長州に勝るとも劣らぬ最新鋭部隊を有することになった。

建白書は、龍馬、後藤が再度上京し文案を練つた。それを寺

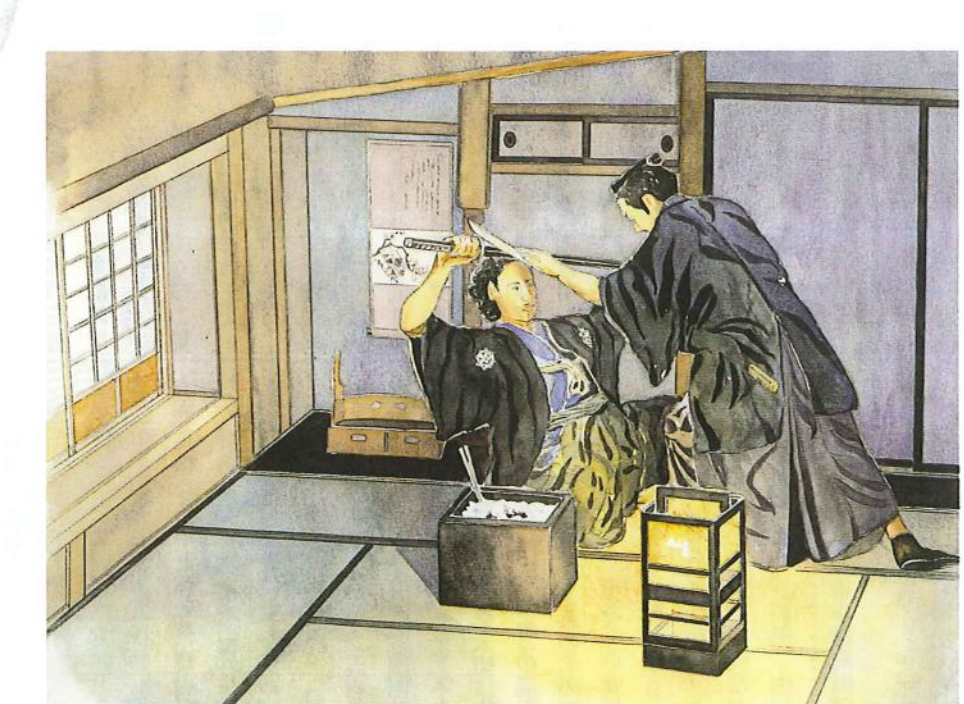
建白が受け入れられぬ場合、切腹覚悟の登城であつた。十三日午後二時、慶喜は在京四十藩の代表を前に、土佐藩より提出された「大政奉還」の建白を受けそれを宣言した。ここに徳川幕府は二百七十余年の政権を失う。後藤からの知らせを受けた龍馬は「無血革命、なつたぜよ」と海援隊の仲間を前に号泣し、慶喜の英断を称えたという。

ただ、成つたかに見えた「無血革命」だったが、武力倒幕という歴史の流れは止められなかつた。一ヶ月後、慶応三年十一月十五日、京都「近江屋」で龍馬と中岡慎太郎は何者かの凶刃に倒れあつてなくなつてしまふ。

そして、慶応四年(明治元年)正月早朝、一発の銃声から鳥羽伏見の戦いとなり、戊辰戦争へと発展、旧幕府軍が朝敵となるに及び、山内容堂、後藤象二郎等の努力もむなしく、土佐藩における左幕は終焉する。

### (六) 天皇の御世となりて

薩長より一歩遅れて土佐藩も参戦した。豊範は胡蝶隊や乾(板垣)退助総督大隊司令、谷干城を大軍監とする「迅衝隊」六百余名を中心とする最新鋭部隊を出兵、官軍の主力部隊として東



(画) 和田 通博

征、大活躍をすることとなる。官軍と旧幕府軍との武器の優劣が戦の勝敗を決した。中でも白虎隊の悲劇に代表される会津との戦いは壮絶であつた。従軍した吾川郡秋山の郷士 細川義昌、岡崎長之助、延蔵兄弟(私の祖先筋) 小島捨蔵(迅衝隊二番隊長)らは語り、益には先祖と共に戊辰戦争での犠牲者を供養していたと聞く。

その後、容堂は新政府より慶応四年(明治元年)五月三日、従二位権中納言、明治二年十月二十日、正二位、禄五千石を下賜。また、豊範も明治二年五月二十三日、御軍賞として四万石を賜り、高知藩知事を拝命されるに至り、左幕の象徴的存在であつた「一心不乱」の信家「鏢」に文鎮として与え、暗に今上天皇と新政府に対する容堂(山内家)の忠誠心を示したので。彼らを証人として。

山内容堂と中田宗閑の思慮深さと強い信頼関係がしのばれる。(次回へ続く。今回は最終回)

を持つにしのびず、旧知の仲であり良き相談者でもあつた茶人の中田宗閑師匠にその苦悩を打ち明けた。

明治三年の早春、容堂は宗閑師匠から「梅見の茶会を催すので、何か梅に因んだ品を一つ持参するように」との茶会への招待を受ける。容堂はその意を解した。信家の鏢を持って江戸白金の宗閑の屋敷に赴いた。そこには昨夜の雪の残る庭に、苔むし今にも朽ち倒れそうな梅の木が、寒さに耐え、その命を搾り出すかのように紅い花を二輪三輪咲かせていた。客人はそれぞれ持ち寄つた梅を披露し、やがて座は酒宴に移り、程よく酔いも回つたころ、持ってきた品のいわれの説明が求められた。

池田詮政は、タバコ入れで金唐皮地に「加納夏雄」の梅花金銀高彫り象嵌金具付きキザミ入れと梅の古木をあしらつた象牙のキセルいれ。

毛利元徳は「雪舟」の雪中梅花図扇面(探幽、古筆了意箱書) 松浦詮心月は、寒梅と「利休」銘のある古唐津の茶入(玄々斎箱書)。

山内容堂は鏢形梅花(麥木瓜)の「一心不乱」の信家「鏢」(明珍大隅守宗介、折紙)。容堂は秋山久作に何度も聞いていたその由来を滔々と話してきかせ、

最後に「佐幕」の象徴たるものでござる」とむすんだ。末席に控えていた谷文晁派の画家荒木寛一は梅花模様眼あり池に「霊眼」ある「端溪硯」。銘は「同治上元冬(清国・同治帝のころ) 小山深雪主人沐帝氏珍」とあり、戒めの文字が書かれている。やがて客人の話も尽きたころ、宗閑は「いづれ劣らぬ名品ばかりでございます。淋しかった我が家の梅もさぞや喜んでおりました。本日の梅見の宴は重畳でございます。梅の花がぱつと咲きましてござりまする」深く頭を下げた。宗閑は容堂に「折角良い端溪硯がありますれば」と画賛を所望した。容堂はそれに応じ、江戸火鉢の前に座する宗閑を描き賛をした。その時容堂は鏢を文鎮の代用として使用したとつたえられている。宗閑翁の画像は永く中田家に伝来していた。

「荒木君、さすがいい端溪だ。君は絵師だから良い文鎮も入用だろう」言いながら信家鏢を手渡して一座を驚かせた。

翌日荒木寛一は容堂に、信家を返そうとしたが容堂は笑って受け取らず、威厳ある口調で重々しく言った。

「荒木君既に聞き及んでおられるとおもいますが、昨年(明治二年)新政府より廢刀令が布告されたことを」

「ハハハッ」

容堂はうなずいて目を閉じ静かに言った。

「鎌倉以来七百年、徳川幕府二百七十年、武士の世は終わったのだよ、荒木君」

「ハハハッ・・・御前の御胸中、お察し申し上げます」

言つて平伏する寛一に容堂は言葉が続いた。

「しかしのう、今ではこの容堂、新政府より『正二位権中納言』禄五千石を賜る身なのじゃ」

貫一の前に座を移すと容堂は声を細めた。

「いつまでも將軍家への忠誠心の証たる『一心不乱』の信家「鏢」をもつことは許されぬのじゃ」「そちらなら分かるはず」

貫一の目を見つめ、つぶやくように言った。貫一は二、三度小さくうなずいた。容堂の声が急に高くなった。

「そうよ、天皇の御世となつたのじゃ」

天を仰いだ容堂目に涙が浮かんでいた。容堂の意を察した貫一は

「この『一心不乱』の信家「鏢」寛一ありがたく頂戴つかまつります」と深く頭を下げた。

「中田宗閑師匠は、山内容堂公の意思を受け『一心不乱』の信家「鏢」の梅に因んで、庭の梅の花が咲くのを待って『梅見の宴』を催し、勤王派である毛利元徳等の諸侯と山内容堂、少し場違いな画家、荒木寛一を招待し、頃を見計らつて容堂が『佐幕』の象徴たる『一心不乱』の信家「鏢」を、彼らの面前で寛一

に文鎮として与え、暗に今上天皇と新政府に対する容堂(山内家)の忠誠心を示したので。彼らを証人として。

山内容堂と中田宗閑の思慮深さと強い信頼関係がしのばれる。(次回へ続く。今回は最終回)

### 参考

参考4 荒木 寛一のこと  
荒木寛一は谷文晁派の絵師南北合派の荒木寛快の弟子で、寛一と兄弟弟子であり、山内容堂に愛された。特に寛一は絵師としてより酒席の取り巻きとして喜ばれ、文久年間にも江戸柳橋の「亀清楼」で「河合正宗」の名刀を拝領したとの話が残されている。(酒席の酔狂としてだつたらうが)

参考5 中田宗閑翁のこと  
茶人として幕末維新期の江戸で活躍。

大名、松平慶永(春嶽) 山内豊重(容堂)、毛利元徳、池田詮政、松浦詮(心月)や、多くの知識人、東久世道禧(竹亭)、紫野大徳寺(四七三世)、海雲義嗣、利休(十一世)、玄々斎宗室、伊藤馬吉(宗幽)、荒木寛一(画家)らと交流があり、中でも容堂とは特別親しかったと見え、写真や手紙等、資料が多数残されていた。

また、寛一より譲り受けたと見られる梅花端溪硯も蔵されていた。しかし、それらは私が譲って頂いた端溪硯の他は、先の阪神大震災で屋敷と共に消滅した。不幸中の幸いか、それらのコピーが我が家に残されている。



端溪硯  
(裏面に漢詩が彫られている)  
我居山惟汝畔  
写靈飛語全鑑  
止行恒汝見



容堂書  
明治3年10月28日、中田宗閑、還暦の祝いとして「閑翁」の号を贈る。「東海外史」は容堂の別号である。



# 拝啓 龍馬 殿

122通

平成24年3月21日〜6月20日

大学生生活最後の卒業旅行で高知を訪問させていただきました。桂浜や高知城、龍馬記念館等、行く先々で出会う高知の人々の心の温かさや感動し、感謝の気持ちでいっぱいです。ステキな思い出がまた一つ増えました。4月からは社会人として、周りの人達への感謝の気持ちを忘れず、志をもって頑張っていくことと思ひます。

(3月21日) 岡山 E・H 22歳 女性

龍馬さんこんにちは。またお邪魔しました。今日は龍馬さんが脱藩された日だそうですね。そして、その日の龍馬さんと今の僕は同じ年になりました。その日の龍馬さんと違い、今の僕は志というものが、覚悟が足りてないかと思いますが、以前お邪魔したときよりは、しっかりとつくりたいです。龍馬さん、今あなたの愛した日本はひどく傷んでいます。心配されるかと思いますが、今の日本人は強いと思います。大丈夫です。日本人の底力、上から見ていくと大丈夫！

(3月24日) 愛媛 K・A 28歳 男性

4カ月前半にまたお話をしにやってきました。今回は報告です。入学式から卒業してきた子ども達135人が卒業していききました。ちょうど「龍馬伝」放映のときの子も達なので、事あるごとに龍馬さんのエピソード

を語ってきました。もちろん卒業文集も。自分だけの夢を考えるのではなく、自分が日本にできること、世の中にできることまで考えた夢をもっとほしいです。6年間関わってきた子たちの卒業はさびしさもあります。でもきつときつと大きく羽ばたいてくれるだろうなと期待しています。4月からはまた新しい5年生との生活が始まります。私にはなかった志をたくさんの子も達もち、それを実現させてくれたら、私もちよつとだけ世の中の役に立てるのでないかと思ひます。また来ます。

(3月25日) 東京 C・E 女性

龍馬の人生を知れば知るほど泣けてきます。なぜ龍馬がこの世に生まれてきたのか、その意味をとても感じる。きつと私にも私の使命がある。この時代に生まれてきた意味を見つけない。少しでも誰かの役に立つ人間になりたいと願う。今が精一杯で前が見えないけれど、とりあえず龍馬の人生にはげまされながら前進していくよ。

(3月27日) 兵庫 N・N 34歳 女性

10年後の自分に誓います！2012年4月より就職します！10年後も持ち続け、技術士になるという夢を持ち続け、自身の仕事をまっとうすべしよ！そして親、兄弟、従兄弟を大事にし、皆で仲良くいつまでも笑えるよう

に！壁にぶつかつたときも何度も乗り越えたいと思います。龍馬のようにひた向きな心で頑張り続けます！

(3月29日) 愛知 K・T 22歳 男性

お元気ですか？私は元気に過ごしています。私は今、大分県で大学院に通いながら、福祉施設で働いています。日々動き回り疲れていますが、日々の日本の福祉を変えなくてはと、龍馬さん同様頑張っているつもりです。いろいろな人と会い、いろいろなことを学ぶ毎日です。私は小学校2年生のときから龍馬さんが大好きです。高知には年に3回ほど龍馬さんに会いに来ます。元気をもらい、また走るためです。また今日から頑張ります。

(3月29日) 大分 K・Y 23歳 女性

昨夏、初めて来館させていだきましたが、このたびまた縁あって再びやって参りました。前回同様、息子(健太)同伴であります。昨夏以来、息子にいたっては、日を追うごとに龍馬先生への慕いつのり、再び参上に至った次第であります。また、このたびはジョン万次郎、中岡慎太郎ゆかりの地にも赴くことができご満悦の様子です。これからも時間の許す限り、親子から引き継がせてもらえるものは伝えていこうという決意です！

(3月30日) 大阪 N・N 47歳 男性

今日は息子龍馬の希望により、生まれてから三回目の高知に来ました。自分の息子に、志を持って大きくなって欲しいと願ひ、龍馬という名前をつけて本当によかつたです。息子も龍馬と

いう人間を知って、自身も誇りに思っているみたいです。成長の区切りで書いていますが、小学生のときに来て書いた一文が見つからず残念でした。今後成人になるまで、中学・高校・大学と自分の夢や希望を持って、坂本龍馬のように人生を送って、後悔しないように生きてほしいです。これから人生の大きな壁や挫折があると思ひますが、乗り越えて自身の幸せをつかんで欲しいと思ひます。これから大切な息子たちを見守っていただきます。

(4月1日) 石川 Y・Y 42歳 男性

自分が龍馬という名前がつけられて13年経ちました。時にはあなたの思考を自分の考えに取り入れたときもありました。そのときに共通していなかったことが、次につながるような結果でした。同じ失敗でも良い失敗だったのです。勿論成功したこともありますが、あなたも必ずしも一人だけで成し遂げたことばかりではないと思ひます。自分も皆と協力して、これからも海のような広い心と山のように強く固い心を目指していきます。

(4月1日) 石川 R・Y 13歳 男子

桜の花も散り、山々はうすい緑になりかけております。太平洋の海を眺めながら、(メッセージを)つつつているところです。私の住まひは霧島市で、龍馬さんが治療された塩田温泉はわが家からは約20分くらいで行ける場所です。温泉に入りながらいつも龍馬さんのことを思ひ出しております。幸いに実家が土佐清水市なので、今年もやってきました。朝早くから龍馬記念館へ来

お元気ですか？私は元気に過ごしています。私は今、大分県で大学院に通いながら、福祉施設で働いています。日々動き回り疲れていますが、日々の日本の福祉を変えなくてはと、龍馬さん同様頑張っているつもりです。いろいろな人と会い、いろいろなことを学ぶ毎日です。私は小学校2年生のときから龍馬さんが大好きです。高知には年に3回ほど龍馬さんに会いに来ます。元気をもらい、また走るためです。また今日から頑張ります。

(3月29日) 大分 K・Y 23歳 女性

昨夏、初めて来館させていだきましたが、このたびまた縁あって再びやって参りました。前回同様、息子(健太)同伴であります。昨夏以来、息子にいたっては、日を追うごとに龍馬先生への慕いつのり、再び参上に至った次第であります。また、このたびはジョン万次郎、中岡慎太郎ゆかりの地にも赴くことができご満悦の様子です。これからも時間の許す限り、親子から引き継がせてもらえるものは伝えていこうという決意です！

(3月30日) 大阪 N・N 47歳 男性

5月の太平洋、波静かに寄せているのを龍馬様と一緒に聴いております。誠に心地よく、体の芯まで響いておるのを感じています。これはきつと貴方様が世界を意識されたときに思われた事と同じかもしれません。昨年は東京の雅叙園でお逢いしたと思ひますが、今ここで(三度目)お逢いできて、新しい息吹や力をいただけますことに感謝を申し上げます。次回お逢いできることを念じて、「卯波立」土佐にひと日居たりけり」ちから

(5月25日) 東京 T・Y 71歳 男性

初めまして！ようやくここに来ました。32才でようやく龍馬さんと来ました。32才！息子・稜馬もシェイクハンドをできてよござんています。まあ、誰よりも僕が一番喜んでますけど(笑)。息子にも「自分の意見がちゃんと強いの男」「自分が自分である大きな男」になってもらいたいと思ひます。龍馬さん！ヒマがあつたら少しだけ気にかけてやってください。よろしくお願ひします。

(5月16日) 東京 D・I 32歳 男性

大河ドラマ「龍馬伝」を見てファンになりました。雄々しい一方、繊細な一面もありお茶目、素直、もし私と同じ時代に生きていけば、私はあなたを敬ひ、人間として愛します。今の時代が、あなたの望む時代になっていくか分かりませんが、あなたのいない今を生きる人間として、少しでもこの世の中を助けることができたら。

(5月18日) Y・H 26歳 男性

\*\*\*編集者より\*\*\*  
旅立ちと、出発の季節3月から6月に寄せられたメッセージをご紹介しました。この時期、龍馬は、クリスマスシーズンのサンタクロースにも負けないくらい、たくさんメッセージを受け取ります。決意を宣言するメッセージも多いですね。お帰りの前には必ずシェイクハンド龍馬像と握手していただきますよ！龍馬が背中を押してくれますよ！  
尾崎 由紀

## シルクロード・消えたロバ車

森 健志郎

発足したばかりの「坂本龍馬財団」へ、中国新疆ウイグル自治区から二人の女性会員を迎えた。5月、シルクロード旅行一番の成果かもしれない。私がシルクロードにはまったきっかけはもう20年近く昔のことだ。中国が国策で観光資源としてシルクロードを世界に売り出すことになり、在京の地方新聞社の記者を取材旅行に招待した。その際、中国側が我々旅行団につけた現地通訳に廉忠雲さんがいた。ウルムチ、トルファンを担当であった。日本に行つた事はないと言ひながら、見事な日本語に一同兜を脱いだ。以来、我々にとってシルクロードは廉さんと私にとつてウルムチは第二の故郷と呼んでもいい。多くの友人が出来た。が、それ以上に廉さんにはいまや100人を越えるほどの土佐の友人がいる。恐らく新疆1だろう。

## ここは館長の部屋

さてもう一人、張洋さんいや、張洋教授は留学時代我々の中国語の先生であった。ウイグル方言研究の権威で、世界を飛び回つておられる。留学生相手の中国語の時間などは教授にとつてレクレーションみたいなものだったろう。中国語を教えると言うより、日本語を学ぶ姿勢の方が強かつた。そんなわけで、卒業後もお付き合いが続いている。だからウルムチに行けば必ずお二人とご家族には会うようになっていく。廉さんとは砂漠を走る車の中で、張洋教授とは新疆大学教員宿舎のお部屋で盛り上つた。共通していた話題は単にシルクロードのことと言うより、社会、政治、経済の日常について「世界が」「中国が」「新疆が」「日本が」と具体的な人間の幸せ論のようになつた。

後を絶たぬテロ、福島原発、格差社会：話は熱を帯びた。そんな中、日本で今一番人気のある歴史上の人物として坂本龍馬のことを話した。その魅力を、私心なく、公に尽くし、時には命さえ惜しまない人物、だと話すと「今、中国でも求められているのは同じである」と共鳴した。では「坂本龍馬を中国の人物に置き換えたなら？」には「うーん毛沢東？」と廉さん。張洋教授は「さあ、周恩来かなあ」。それぞれである。大中国の特異性を感じた。

お二人はその後、坂本龍馬財団への入会を快く承諾してくれた。世界中が揺れている。変貌の時期を実感する。11日間で2700キロ走つたシルクロードから、名物ロバ車が消えていた。

## 別館の必要性訴える検討会を継続

### 県議会文化厚生委員会が視察来館

5月22日(火)、県議会文化厚生委員会が視察のため、記念館を訪れた。来館されたのは、樋口秀洋委員長、川井喜久博副委員長、弘田兼一委員、梶原大介委員、西岡寅八郎委員、清藤真司委員、中内桂郎委員、大石宗委員、中根佐知委員の九名で、他に議会事務局、県文化国際課、指定管理者である公益財団法人高知県文化財団、記念館からは森館長、板垣副館長、学芸員の三浦・前田・亀尾が出席した。

記念館講義室にて挨拶の後、館長より「龍馬伝」以降の入館者数推移と、桂浜の観光拡大にもつながる収蔵庫や展示施設充実の必要性、20周年事業「風になった龍馬」展と、アメリカフォーラムから発展した「龍馬財団設立」の経緯などについて説明した。特に財団設立が、アメリカフォーラムを後方から助成金補助を行った「日本財団」から大いに認められたことを強調した。

質疑では、施設充実のための検討を今後も継続すること、記念館と龍馬財団の関係性については連携を取り合いながら、双方が発展していく対象としての認識の必要性など確かめ合った。

その後各委員は、前田学芸主任の案内で、常設展、現在開催中の企画展「龍馬と加尾と収二郎」、そのほか館内を見学された。記念館の前では、昨年設置された「シェイクハンド龍馬像」とひとりひとり握手し、最後に全員で記念撮影をされた。亀尾 美香





## ■ 館発展へ、貴重なアドバイス 平成23年度 記念館のアンケート

平成23年度の「記念館入館者アンケート」の結果がまとまりました。総入館者数は228,951人中、7,973人の方からご協力いただき、回答率は約3.5パーセントでした。全体数から見れば少ないようですがその中に書かれている貴重なご意見・ご感想は、興味深い内容であり記念館をより良く運営して行くヒントとしても大いに役立っています。

たとえば、記念館の建物は桂浜の高台に建っており、そのロケーションと太平洋が一望できる景色に満足の声を多く聞きます。また、展示に関しては、龍馬の手紙、龍馬と中岡慎太郎が暗殺された“近江屋”の復元セット、2階南端のガラスから見える“海の道”などが目を惹くようです。反対に注意すべき点については、「動線がわかりづらく館内の順路を示して欲しい」「パネルの文字が小さく読みづらい」というご指摘が多く、案内板を作成したり、文字を大きくしたりと工夫を重ねています。また、「パネルの文字が間違っている」場合はそのつど訂正をし、改善できる部分は直ぐに答えを出し、アンケートの声を現場に反映させるよう心掛けています。しかし、時には私達職員に対する励ましの言葉や、辛らつなお叱りの言葉もダイレクトに届きます。ただ、いつまでも皆様の正直な思いと言葉が届けられる坂本龍馬記念館でありたいものです。

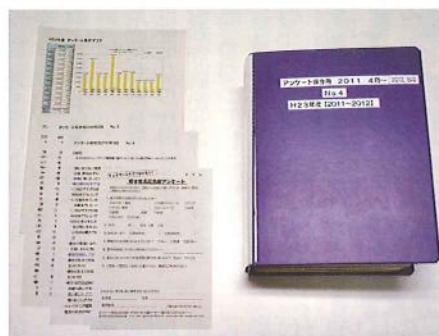
このアンケートの特徴は「幕末のお気に入りの人物は？」と「シェイクハンド龍馬像と握手をしましたか？」という2項目が設けてあることだと思います。幕末のお気に入りの人物は、毎年ベスト10を選び、館の“海に見える・ぎやらしい”で展示発表し、熱心に見ていただいています。シェイクハンド像は、今や握手だけでなく一緒に写真を撮る人も多く、面白いポーズの写真がたくさん生まれています。

また、今回のアンケート回答数の1位は何と高知県でした。入館者数では1位が兵庫、高知は10位です。地元の入館者数をいかに増やすかは、館の課題の1つですが面白い結果となりました。

最後に心に残ったアンケートを1つご紹介します。

「龍馬に想いを寄せてから何年が経つのでしょうか…。やっと龍馬の生まれたまち高知を訪れることができ、龍馬が見つめている海（太平洋）のその立ち位置桂浜に立っています。どこからか、龍馬の声が聞こえそうな…。そんな素敵な・坂本龍馬記念館”です。また、必ず“龍馬を感じる”ために訪れます。」（女性・50代）

中村 昌代



## ■ もんきりうちわを作ろう!! 「イオンワークショップ」一番手 龍馬記念館



当日参加も受け付け、たくさんの親子連れでにぎわった。

坂本龍馬記念館としては2回目となるイオン高知ショッピングセンターでのワークショップが6月16日土曜日に実施される。（※原稿時6月1日現在）今年の1月、高知県文化財団の施設6館合同で行われたワークショップが好評だったことがきっかけになり今年度から各館が交替で実施することになった。その第1回目が龍馬記念館ということで現在、ワークショップの準備に追われている。

内容は夏休み子ども教室でもおなじみの「もんきりうちわを作ろう!」。江戸時代から遊ばれている紙切り遊びを取り入れたうちわ作りとあって、毎年大人気のワークショップである。最初は完成模様が想像できない形からおりがみを折り、はさみで切っていく。開いてみるとそこには素敵な模様が仕上がっている。「紋切り」という聞きなれない名前、そして完成するまでドキドキしながら楽しめる工程が多く参加者に受け入れられているのだと思う。いよいよイオンワークショップでも実施する機会ができた。一人でも多くの方に工作の楽しさ、そして坂本龍馬記念館へ興味を持っていただくきっかけにしたい。

山中 真優

## 編集後記

「風邪をひいたから」などとそんな私事を言い訳にするのは実に情けないが、今回はその「風邪」にこっぴどくやられた。風邪で病院にいった覚えがない私が、最後は家族に叱られて病院に。そんな具合で飛騰原稿のとりまとめが遅れてしまった。5月の「現代龍馬学会」総会、それに「坂本龍馬財団」のスタートなど、龍馬記念館のこれからのサイドから支える“組織”の節目となったが、飛騰本体と現代龍馬学会ページとの連携にもう一つ達成感に欠けた。ただ、内容は企画展の充実、駐日アメリカのルース大使来館、イオンでの子供相手のパフォーマンスなど、外部への発信という館の目指す目的は徐々に達せられている。ともかくクリア、苦難の82号となった。（モ）

## 入館状況

2012年6月20日現在（開館以来7,479日）

- ◆総入館者数 3,220,226人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2012年度最多入館(2012年5月4日) 3,119人
- ◆2012年度最少入館 (2012年6月19日、台風のため) 57人

館だより“飛騰”第82号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2012(平成24)年7月1日 〒781-0262 高知市浦戸城山830  
 発行 高知県立坂本龍馬記念館 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015  
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>  
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・  
 戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名  
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

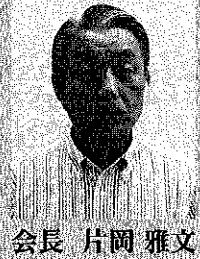
館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください



# 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

## 第4回現代龍馬学会

### 「志(こころざし)に生きる」 ～4年目に向かって、目標と課題～



会長 片岡 雅文

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会  
の第4回総会と研究発表会が5月12日、  
国民宿舎「桂浜荘」で開かれた。

2009年に学会が発足して  
から3年余り。初めに会員の出席  
による総会で、この1年の歩み  
を振り返るとともに、新しい予  
算や事業計画などを質疑・承認  
して、4年目のスタートを切った。

次いで、来賓の県議会議長武  
石利彦さん、高知市教育長松原  
和広さんから祝辞をいただき、  
学会理事の竹内土佐郎さんが  
「龍馬甚句」(坂本登さん作詞を  
披露。そのあと県内外から一般の  
人たちを含めて82人が参加し、  
「志(こころざし)に生きる」をメイ  
ンテーマにした研究発表会が開  
催された。登壇した7人の発表  
は、これまでも増して中身の濃  
い、充実したもので、その熱気は  
終了後の懇親会に引き継がれ、  
にぎやかな語らいが夜までつづ  
いた。早くから総会と研究発表会  
の準備に取り組んでくださった  
理事や会員の方々、龍馬記念館  
のスタッフの皆さんに、あらためて  
感謝したい。

#### 独自の知見を生かした 研究発表

研究発表は、徳島大学名誉教  
授の渋谷雅之さんをはじめ、大

城戸圭一さん、川崎桂佳さん、窪  
内隆起さん、吉井淳さん、吉岡  
郷継さん、亀尾美香さんの7人  
の方々。龍馬と樋口真吉、龍馬の  
脱藩と伊予、現代の視点から見  
た龍馬、司馬遼太郎と「竜馬が  
ゆく」、吉井源太と龍馬精神、  
シエイクハンド龍馬像、幕末の志  
士とその志……と、それぞれ  
にテーマを掲げ、独自の知見を  
盛り込んだ興味深い発表が行わ  
れ、大変好評だった。来春刊行さ  
れる現代龍馬学会「紀要」第4  
号に、その成果が収められるのを  
楽しみに待ちたい。

例えば、未曾有の惨事となっ  
た東日本大震災と福島原発事  
故からようやく1年。国のウイ  
ジヨンは失われ、政治や経済は危  
機的情況から脱け出せず、社会  
はますます混乱し、将来への展  
望が開けない。そのような時代  
にあつて、私たちは坂本龍馬の生  
き方や思想に学び、現代に生か  
していこうと努めてきた。

それは、1人1人が「志」を  
持つて生きることであり、人と人  
との絆を大事にして奉仕と互助  
の精神を持つことであり、何より  
も自由や平和を守り、尊んでい  
くことでもあるだろう。

#### 龍馬と「志」 とは

龍馬にとって、「志」とはいった  
いどんなものだったのか？同志の  
溝淵広之丞に宛てて、こんなふ  
うに語っている(草稿・慶応二年十一  
月)。

「……数年間東西に奔走し、  
屢々(しばしば)故人に遇て路人  
の如くす。人誰か父母の国を思  
はざらんや。然(しかる)二忍で之  
(これ)を顧ざるハ、情の為に道に  
乖(もと)り宿志の蹉躓(さち)を  
恐る、なり。志願果たして不就  
(ならずん)バ、復(また)何為にか  
君顔を拝せん。小弟長く浪遊し  
て仕禄を求めず、半生勞苦辞せ  
ざる所……」

(故人)故郷の人、路人)他  
人、乖り)そむく・反する、蹉躓  
)挫折)

数年にわたつて東奔西走し、し  
ばしば土佐の人にも会つたが、他  
人のように振る舞つてきた。故国  
を思わないような人がどこにい  
るだろう？しかし、あえてそれ  
を顧みないのは、前々から心に抱  
いている志が果たせなくなつてし  
まうのを恐れるからだ。志を果  
たさずして、どうやって君公(山  
内容堂)に拝調しえようか？私  
が長いあいだ浪々の身に甘んじ、  
藩の禄を求めず、苦勞を続けて  
いるのはそのためなのだ……。

龍馬にとつて、海軍を興し、国

論を一つにして西欧列強の脅威  
に対抗し、日本を近代的な国  
家につくりかえていくのが、脱  
藩して以来の宿志だった。それ  
を達成するには、土佐のことも  
自分の身の上のことも構つてい  
られない、大義こそ何よりも大  
切なものなのだ、と言うのだら  
う。

この龍馬の語っている「志」の  
意味、現代に置き換えると、そ  
れはどういうことになるのか。  
私たちは一度、じっくり考え  
てみなければならぬ。

発足から3年余りと、まだわ  
ずかな歳月だが、私たちはここ  
まで少しずつ歩みを重ねてき  
た。今後も、隔月の理事会や例  
会、龍馬記念館の機関誌「飛騰」  
の学会ページ上の広報などを  
通じて、互いに協力し、意見を  
出し合いながら、一歩一歩前へ進  
んでいきたい。現在113人の  
会員の輪をもっと広げていくこ  
とも、忘れてはならない大切な  
課題の一つだ。

来年は、学会の発足から5周  
年という記念の年を迎える。将  
来に向けて弾みをつけ、活動を  
いっそう盛んにしていくために、  
何らかの事業を行いたいとい  
う声も挙がつている。これもこれ  
から1年の大事な課題として、  
取り組んでいきたい。

# 新しい境地へ 充実した発表続く

五月十二日に開催された現代龍馬学会総会では、片岡雅文会長のあいさつに続き、二十三年度の事業報告、決算報告、監査報告が行われた。

さらに二十四年度は、これまでの月例会、記念館機関紙「飛騰」での学会紙面(四ページ、年四回発行)、当年の紀要発行、パネル展、講演活動など充実させていく。また、懸案である会員数の伸び悩みについては会員一人ひとりの協力が必要であり、会員増に向け拡充を図る。来年度は節目の五周年になるため、記念行事に向けた予算確保や事業内容の検討をしていく、などを確認した。

来賓あいさつでは、高知県議会議員、武石利彦氏、高知市教育長・松原和廣氏を迎えた。お二人はそれぞれに、龍馬精神の啓蒙と歴史を知り現代を考え見つける場として、現代龍馬学会が確実に

充実してきていると感じていることなどを述べられた。行政、教育の実践現場最前線に立つお二人の言葉には、学会のこれから大きな期待が込められていることを感じた。

続く研究発表は、四年目を迎えていよいよ「現代龍馬学会」にふさわしい内容となってきた。多士済々、さまざまなジャンルと角度から、龍馬をめぐる時代や思想、人物についての発表であった。詳しい内容は、本年度紀要に収録する(来年度発行予定)。

交流会でも新しいメンバーや県内外の会員が和気あいあいと楽しい時間を過ごすことができた。このように、さらなる学会の充実に向け、新たに今年度の取り組みが始まったことを実感する一日であった。



発表を熱心に聞く参加者。質問も相次いだ



会場に設けたパネル展に見入る人たち



交流会では「龍馬甚句」朗詠や踊りなどの余興も楽しんだ

## 宣言

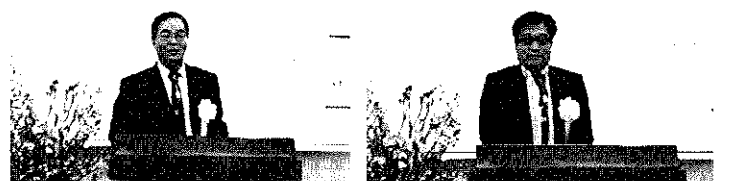
昨年の東日本大震災以来、政治的・社会的な混乱と不安が続く中、高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、発足から四年目に入った。ことしは県内外から八十二人が参加し、「志(こころざし)に生きる」をテーマにして、実りある研究発表と討議を行った。NHK大河ドラマ「龍馬伝」による嵐のようなブームは去ったが、「自由平等・平和」を希求した龍馬への関心は層高まっている。私たちはこれからも、この龍馬の精神に学ぶとともに、発足五年目の記念の年に向けてさらに努めていきたい。

平成二十四年五月十二日  
高知県立坂本龍馬記念館 現代龍馬学会

### ① 渋谷雅之氏 (徳島大学名誉教授) 「龍馬と真吉」



「飛騰」の下に隠れている文字とは 坂本龍馬と樋口真吉には20歳の年齢差があり、その生き様も対照的である。樋口真吉日記「遺巻録」および「日新録」に記録された龍馬を通じて、二人の関係を探った。



松原和廣・高知市教育長は「私は龍馬にない、教育八策を掲げて教育に力を入れている」。私も龍馬ファン。一人、ますますの学会充実を」と来賓あいさつする武石利彦・県議会議員

### ④ 窪内隆起氏 (元産経新聞司馬遼太郎氏担当記者) 「司馬遼太郎と『竜馬がゆく』」



は1960年に『梟の城』で直木賞を受賞。その2年後から『竜馬がゆく』の連載が始まったのである。司馬さんにとって新聞連載はこれが初めてであった。「龍馬」を主人公に書くのも初めてであることを決めたのか、なぜ「龍馬」でなく「竜馬」なのか、キャラクター作りはどうか、ライターとしての工夫したのか、あつたといふ人が言う。ヒントになるような人物その「竜馬がゆく」の産経新聞連載が始まったのが1962年。ちょうど50年前になる。司馬さん語りの感であった。

### ⑤ 吉井淳氏 (吉井源太後裔) 「紙聖吉井源太と龍馬精神」



源太より龍馬は9歳下であるが、龍馬は33歳で亡くなり、源太は83歳まで生きて明治の文明開化の世の中を見つづけた。その点において龍馬の志がどのように果たされたかの検証人でもあるといえる。命だと思ふ。

### ② 大城戸圭氏 (愛媛龍馬の会会長) 「脱藩を決意した旅」



坂本龍馬は脱藩直前、宇和島藩にいた。道場を訪ねた後、伊予路を東から西に下り、松山を経て大洲を通り宇和島に行つたというものである。宇和島を訪ねた後、松山まで帰り、瀬戸内海を渡って長州・萩に久坂玄瑞を訪ねたという推論である。

### ③ 川崎弘佳氏 (高知市立昭和小学校教頭) 「坂本龍馬にみる21世紀型能力」



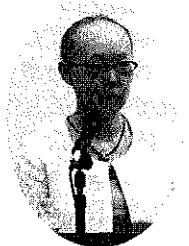
龍馬は宇和島を通ったか? 文久元年(1861)10月から翌文久2年1月までの4ヶ月間の坂本龍馬の足跡について発表した。成果である、特に久坂玄龍馬は、文久元年12月瑞を訪問する前のルートは(脱藩の4ヶ月前)に讃岐・九龍城下の矢野市に進い発表となった。

### ⑥ 吉岡郷継氏 (主在市内宝物料館評議員) 「シエイクハンド龍馬像」



触れる銅像制作の裏話 昨年11月、県立坂本龍馬記念館前に建てられたシエイクハンド龍馬像は、を売る龍馬になりはしない銅像に直接触れられる、いか? そういった疑問を握手ができる像として話。ことん話し合い、三人三様の思いをついにしたものがある。しかも、この像は3「シエイクハンド龍馬像」で人の作家による共同制作である。

### ⑦ 亀尾美香氏 (坂本龍馬記念館学芸員) 「幕末の“志士”と“志”」



素朴な疑問に 研究者としての考察を 「志(こころざし)」とは、困難にくじけず、目的を成し遂げようとする強い気持ちであり、私のためになく、公の利益のために、人々への気高い精神である。志はときに自らの命より優先される。考察した。

# 京都出土の土佐瓦

京都国立博物館 宮川 禎一

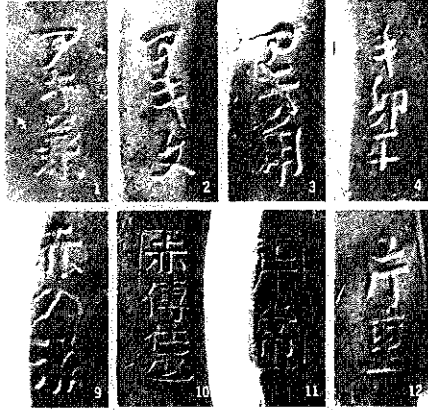
龍馬や幕末史研究の余録がこの短文のだが、筆者の本職はじつは考古学である。今回は京都市左京区で地中から発掘された瓦の話をしたい。

一九九二年、京都大学の北部構内、農学部建物建設にともなうて大学の埋蔵文化財センターの手で地下の遺跡の発掘調査が行われた。この際、江戸時代末頃の遺物が出土したが、その中に土佐で生産された屋根瓦の破片が数多く出土したのだ。

なぜ土佐の瓦と分かったのかというと、瓦の表面に産地や工房を表すスタンプがくっきりと押されていたからである。

「アキ兼」「アキ文」「アキ角」「安喜寅」「赤野銀」「赤の源」「片常」「片重」「片方」「並(並)」「生野角」「中友」「中山林」「いおろい米」「佐古吉」など二十三種に及んでいる。高知県の方にはおなじみの地名である。研究の結果現在の安芸市や香美市、香南市など高知県東部にあった瓦工場の刻印だと判明したのだ。

京都大学の一角からこ



京都の土の中から中岡慎太郎や陸援隊ゆかりの遺物が出て来たという話である。  
(報告書は「京都大学構内遺跡調査研究年報」九九二年度写真もそこから引用しました)

## コラム・龍馬のこと 縁の不思議

現代龍馬学会会員 鈴木 亮

私は坂本龍馬の銅像が立っている円山公園のすぐ近くにて働いている。また南へ進むと龍馬が宿として使用していた明保野亭や龍馬の墓が建つ霊山護国神社がある。こうして龍馬ゆかりの地に近いところにいるのも偶然ではなく何らかの縁があったのではないかと感じている。

京都は妻であるおりょうさんと出会った地でもあり、龍馬の終焉の地でもある。また様々な出来事があった場所でもあるので第二の故郷とも言えるであろう。

一介の脱藩浪士に過ぎなかった龍馬が勝海舟などの人物との出会いを通して船中八策を思いつき、大政奉還という偉業を成し遂げる。龍馬は短い生涯の中で「縁の不思議」を十分に活用したといえるのではないだろうか。思えば人生は縁の連続であり、縁ある人とはつながりを持ち続けているのである。

私自身故郷を離れ、現在の居住地である滋賀県に住んで10年以上の月日が経った。自転車ですら5分ほど走れば琵琶湖が一望できる快適な場所に住んでいる。琵琶湖は古事記にもその存在が確認されている由緒正しき湖であり、その近くに縁があったことについては神様に感謝したい気持ちである。

ところで電車もバスもない幕末において、江戸や京都・長崎など様々な地を駆け巡った龍馬の活力は目を見張るものがある。脱藩をし、諸国を放浪することで縁を生かし、幅広い人脈をつないだという生き方に対しては憧れを抱く。

私も可能な限りはあらゆる地を旅して、素晴らしい出会いに巡りあえるように努めていきたい。ちなみにゴールデンウィーク前半は高知市内を旅行し、龍馬生誕の碑などを訪れた。もちろん坂本龍馬記念館にも。

最後に、龍馬が宿として利用していた寺田屋(京都市伏見区)は現在でも宿泊可能です。興味がある人は是非泊まって下さい。

## “話してみるかよ”

### 龍馬がいない!

高知市立昭和小学校教頭 川崎 弘佳

小学6年になると社会科では日本の歴史を学習する。内容は文部科学省が告示する「小学校学習指導要領」の中に示されており、それを基に教科書も作られている。具体的には「歴史上の人物が当時の世の中の課題を解決し、人々の願いを実現するために様々な知恵を出し合ったこと」などを学ぶ。歴史を人物中心に学習するため、その指導要領には教えるべき人物42人の例示がある。卑弥呼から野口英世まで政治・文化に関わる人物たちだ。幕末から明治初期では勝、西郷、大久保、木戸、明治天皇、福沢、大隈、板垣、伊藤、陸奥が取り上げられている。



なぜか、坂本龍馬がいない。例示にない人物を学習する時間はあまりないので、日本の多くの小学生は龍馬の存在を知らないのが現状だ。筆者は文部科学省教科調査官になぜ、龍馬が学習する人物に取り上げられていないのかを訊いた。その教科調査官は「龍馬は表の仕事をしていないので、子どもにはわかりにくい。」と率直に話してくれた。建物を造ったり、書物を書いたり、天下統一や明治新政府をつくるなど形あるものや人物の働きが明確なものが教えるのにはよいのだろう。

確かに歴史の実を手にした人物の方がわかりやすい。しかし、坂本龍馬は表舞台には立たなかったが、薩長同盟を成し遂げ、船中八策を作るなど上記の人物と同様に近代国家への道筋をつくった一人である。また、子どもの発達段階を踏まえたとしても、神童でもないあの泣き虫龍馬が歴史の中で価値ある働きをしたこと、それを学ぶのは未来を託す子どもたちへの最高の勇気づけになるのではないか。

